

## 鈴木胤『離屋学訓』（1828年）

「学問するは何のためぞとならば、別儀にあらず、文行忠信の四つの教えによりて徳行・言語・政事・文学の四科しなの材〔器量〕を成就せんがためのみなり。文の教えによりて文学の材を成し、行の教えによりて徳行の材を成し、忠の教えによりて政事の材を成し、信の教えによりて言語の材を成すことなり。されども、行忠信の三つの教え、みな文というものを主として取りおこなう。文学の主意は畢竟、徳行・言語・政事の三科を成就せんがためなり。されば、材徳成就のうえにてその科しなを分かつ時は、徳行を上として、言語・政事それに次ぎ、さて文学を下とす。教導修行の次第を以って言うときは、文学を始めとして、行忠信の三科をば、それにつけて教えも学びもすることなり」（1頁）。

「ある人問うていわく、それは漢籍からぶみ論語に出でて異国古代のことなるを、今これを挙げて学問の主意とすること如何。答えていわく、これを論語ぎ限りのこととするは、書を読んでもその益を得ざる人なるべし。そもそも学は道を学ぶなり。道を学んで心に知るは文学なり。口に述べれば言語なり。文字にかき書に著わすも、なお言語なり。これを以って身を修むれば徳行なり。これを以って人を治むれば政事なり。大方、学問ということ、世に始まるよりして必ずこの四つに分かるること、天地の間、古今変わりなし。また、すべて人の心を明らめ曉して方角を誤らず、取りつくところに迷わざらしむることは、名目を以って条理すじを分かち、差別を立つるにあり。このこと、わがいにしえには簡略おんりゃくにして異国にはくわし。かるがゆえにいま挙ぐるところは論語の名目を借りたれども、明かすところは即ち今日こもとして入用たる、和漢古今の學術の総論なり」（1頁）。

「君子は器ならずというも、あながちに器のなきを好むにはあらず。器ありても、それを恃み誇らずそこに滞らざる時は、器なりながら器にあらず」（7頁）。

「すべて内外古今の道、みなその道理を以って主とすることながら、その道理はみな事実の中に籠れり。事実を疎おろそかにして理をのみ好む者は、その理必ず誤りあり。理の字の和訓はことわりにて、理は即ち事のワリなることをも思うべし。されば道理をよく知らんと思わば、必ず事実をくわしくすべし。事実をくわしくせんとならば、それを載せたる文字言語に通ずべし。文字言語にくらく謬りては事実くわしからず。事実くわしからでは道理必ず違い誤るべきなり」（15頁）。

「於蘭陀おらんたの学問のこと、近ごろようやく開けかかりたるは、またこれ明けき御代の一つの験なり。漢国もんこくの人情よりは勝りて、質慤精明なるところあり。浮きたることをいわず。疎謬なること少なきように見えたり。軍法、地理、諸国の紀載、医術、歴算、または利便なる器用等の書、追々に翻訳出で来たらば世の益となることもあるべし。されどもその学をする

者、ひたすらに彼方を善しと思ひ過ぎして、その悪きことをばいわず。すでに御制禁となりしその邪法はいうにも及ばず、無用の巧み、無益不急の理弁、いたずらに奢を長じ多事に過ぐる失のあるをも曉らざること、仏者の仏に迷ひ儒者の漢に溺るる癖に同じきはその失なり。この学をする者、必ずこの失を戒むべし」(16頁)。

「孟子いわく、ことごとく書を信ぜば則ち書なきにしかずといえり。和漢古今を博く見わたすを学という。その真偽、邪正、善悪、有用無用の裁択の明らかに正しきを識しという。学博めても識明らかならざれば、博学はかえって惑いを増す種なるべし」(16頁)。

「武芸の志は公戦を主として私闘を後にすべきことなるに、今時その師たる者よりして、これを心得たがいしたる者多きは大なる謬なり」(18頁)。

「すべて文武諸芸の師、各々みなその元祖よりして君子の人は少なく不学の人多きゆえに、その技はよくても説と心得方においては違い誤り、よくもあらぬことども多し。君子はただその学ぶべきところを選びて学ぶべきなり」(19頁)。

「以上の道芸の二つを学ぶに肝要入用の具、すべて五あり。師と友と書籍と身の精力と志と、これなり。この五つの具の中に特に貴きものは志なり。志ある者は事ついに成るといふ語あり。志なき者の事の成りしためしなし。志だにあれば、精力もその方には自ずから強くなり、師友書籍も自ずから好むところには集まるものなり。志なき者は師にあえども問わずいたずらに市人に向かうがごとく、師もまた、如何如何と言わざる者をばわれ如何ともせんかたなしと見限るべし。されば、人を諫むる者は世に乏しからず諫を受くる人の無きがごとく、教うる者の無きにはあらずしてただ志深く学ぶことを好む者の得がたきなり。人、志だに深く篤ければ、あながちに明師良友をのみ師友とはせず、つねに交わる世中の人、つねに見聞する世中の物事、みなわが師友なり」(19頁)。

「例えば、いかようの儂く聊かなる書ふみ一卷をとりても、文学に志ありて見る人は文学の益を得、徳行に志ありて見る人は徳行の益を得、政事に志ありて見る人は政事の益を得、言語に志ありて見る人は言語の益を得べし。かくのごとく、志すところにはその益を得て、志さぬところにはその益を得べからず。されば、鹿を追う獵師山を見ずといえり」(19頁)。

「されば、学を好む心の深く厚うして、志すところの高く大なるほどあらまほしきはなし。その志深き時はその至るところも深く、大なる時はその成すところもまた大なるべし。されど小さく志して小さく成るも、聊かも志のなくて一つも成すことのなきよりはなお勝りぬべきなり。人の資質に大小あり成るところに大小ありて世中の大小の用を濟なすこと、これ造化の神靈、産靈むすびの大神の御神徳の妙安排なり」(20頁)。

「師を信じ尊むことを知る人は、何事も打ち任せ押し譲りてのみありて、自心を励まし勉めて師に均しくならんとも思わず、まして勝らんとも思わぬ癖あり。これまた卑怯下劣の心なり。いずれの道芸も、自ら勉めずして成るべきようなし。これを海中に舟を漕ぎゆくにたとえれば、身の志と精力とは帆に風を受け櫓を推すがごとし。師はただ磁石を視て方角を示し、<sup>ともし</sup> 艦にありて梶を使う人のごとき者と知るべし」(20頁)。

「道と芸との二つを学ぶに、師・友・書籍の三つ、ともに一つも欠くべからず。畢竟、書籍は死したる昔の師友にして、師友は生きてる今の書籍なり」(22頁)。

「宋儒・鄭樵 [1104~1162] おもえらくは、古人、図を左にし書を右にすといえり。図と書とは各々その用ありて、偏廢すべからざるものなり。天文地理よりして人事の衣服、器物、宮室の制度、あるいは鳥獸、草木の形状等、みな文言のみにて図なくしては明らかに知りがたし。さるによりて、図譜の学亡ぶるときは実学廢れて虚文となりぬ。しかるに図は写し伝うるに難うして、誤りなき信図の世に得がたく、また人情は空言文辞をば好むもの多く、実学を好む者の有りがたきによりて、後世、図譜衰えて書籍のみ盛んになれり。これゆえに実学に志すものは、必ず図譜に深く心がくべきことなりとぞ」(23頁)。

「後世、雅語に暗き者、<sup>からかみ</sup> 漢籍の訓をつけ来たれるゆえに、今時の読み方には宜しからざること多し。それ心して改め正すべきことなり」(24頁)。

「書を読み読みして力も付き、おもわくも立ちたらん時には、著述を思い立ちてその筋の抄書をすべし。人のためにせんとするしわざ、まず自らの益になるは、いわゆる教学相長ずることわりなり」(25頁)。

「書籍をよみ師友の益を求むるに、八九分六七分信仰したる書と人とならば、その一二分三四分の悪きところをよくわきまえて、迷わじ移らじと心がくべし。もし一向取りどころなしと思わば、その十に一つ百に一つの善きことを尋ねて、落とさじ遺さじと心がくべし。これ、愛してその悪を知り、<sup>にく</sup> 悪んでその美を知るといえる語の意にて、文行忠信四科の学に涉れる心得の肝要なり」(25頁)。

「いにしえは人々の<sup>てきく</sup> 手作にしたりしことの後世はその職人の出で来たれるごとくに、人を教うる師、治むる役人の、いにしえなくして今は出で来ぬるも、またこの道理なりと心得べし。これを君子の道は時々にてあたらすといえり。すべて中正順当の名は、時と所と人と事とによりて動きかわるものと知るべし」(29頁)。

「歌をよみ詩を作り、風流風雅の志を養う時は、自然と打ちあがりたる優美の風にうつりて、

鄙吝をはなれ敦厚におもむく益あり。これ漢国<sup>もろこし</sup>のいにしえ、書礼のほか詩の教え樂の教えあると一つ趣なり。これを知らずしてひたすらに方正なる教えのみを好みて博覧を戒む様の学風は、固陋と偏狭とにおちいりて、ひたすらに人をとがめ攻むるのみにて、寛裕仁恕の風なく、かえって自らの行ないは行き届かざることもあるものなり」(30頁)。

「すべて人君執政の身分は、わが身に才智はなくとも、ただ仁徳を以って百官のさきがけとなり、その志を以って広く賢材を求めて多くの人の才智を遺さず滞らしめずして進め用うること、これ政をするまことの才智というべし」(31頁)。

「政事の根本悪しければ末必ず乱れて、さまさまの難渋出で来るとき智慧才覚を用いてそれを救わんとするは、不養生の業をしつくりて大病を生じてのち医薬を以ってこれを救うがごとし。上工は未病を治すの語より見れば、大いに手遅れなることなり。されども取り返すべきことならねば、たといその材徳の人これを受け取りたりとも、病急なればまず標<sup>すえ</sup>を治すの語のとおり、さしあたりてはこれを救う才略を用うることもあるべし。されどもそのしかた根本の筋に背きたることにては、かえって害にこそなるべけれ、益はさらにあるべからず。とにかくに、なるべきたけは根本に立ち返りて療治養生をせんことを心がくべきなり。世に腎虚をして腎薬を飲む者の心を尋ねるに、先非を悔やみ、命の亡ぶるを恐るるにはあらで、なおもその薬を頼みにして色欲をほしいままにせんとする者多し。愚昧の至りというべし。政事の上にもこれに似たることのあらんは散々のことなり」(32頁)。

「九功三事〔政治〕の大要は、ただ民を富ますと教うるとの二つにとどまれり。教えんとするにはまず富ますべし。管子にいわゆる倉廩みちて礼節を知り、衣食足りて榮辱を知る、これなり。また、富まさんとするにはまず教うべし。上、儉徳を以って下のさきがけをしたまい、下、礼儀を知り法制を守りて分限を越えず職業に勤め励むは、下の困窮せざる道なり。しからずしてただ寛裕の仁恵のみにて下を富まさんとするは、底なき袋に米を満て、尻を結ばぬ<sup>きし</sup>纏に錢をささんとするがごとくなるべし。さるによりて、政事なき時は財用足らず、と孟子もいわれたるなり」(34頁)。